

重要伝統的建造物群保存地区

# 美々津

和船と共に繁栄した湊町

### □伝統的建造物群の特性

美々津の近世以後の歴史は、港の歴史とも言える。現在の港は、 護岸工事によって整備され、海岸線に沿って防波堤も設けられてい おり、小型漁船の基地となっている。

往時の面影を残す家並の中には、外観を現代的なものに模様替え したものが少なくないが、江戸時代からの伝統をもつ道路や宅地割 りとともに、なお多くの古い家が遺されており、当時の港町として 繁栄の跡がしのばれる。

上町、中町、下町の道路沿いには江戸時代末期から明治、大正時代に建てられた伝統的様式をもつ妻入、平入の家々が並ぶ。二階を登屋造とし、虫籠窓、格子窓を設け一階に出格子や腰格子、それにバンコと呼ばれている床孔を付設した厨子二階造の建物が多く、なかには二階になまこ壁と漆喰の戸袋を設けた重厚な建物がある。また、正面庇の前面両端に漆喰塗りの戸袋を設けて防火用の土戸を収納している家もある。しかし、家の様式は、みな同じでなく、建築された時代や町内での町の性格を反映して多少異なった特徴をもっている。

なお、伝統的建造物のなかには骨組みを変えていないが外観を改 装しているものが少なくなく、また商店には伝統的景観にそぐわな い大きな看板があがっている例もある。

支道路沿いの建物の側面には、石垣を積み漆喰を塗った土塀がある。ツキヌケという防火帯には共同井戸、消防器具庫など集落空間を意識した実用的な施設もある。さらに道路は、浜石を利用した石畳や柱状岩を用いた石垣が採り入れられたところもあり、土塀や石積みによる排水路とともに道路空間の質を高めている。現在、これら道路は多くコンクリートやアスファルトで舗装されているが、集落空間を構成する重要な要素である。

集落の山側には、修験場跡として伝えられる神社仏閣のなごりを 遺す緑地帯、美々津県庁跡があって、町並の背後を豊かなものにしている。

このような建物や工作物は、常に海を意識して計画的、組織的に 造られ、周囲の環境とともにかつての港町の面影をいまなお強く伝 えている。







通りの江戸期の建物:手前から旧薩摩屋(廻船問屋)、旧大阪屋(廻船問屋)、旧若松屋(呉服、旅館業)、共に切妻屋根である



□上町の町家で開業するカフェ。内部をほとんど改造していないので往事の空間を体験でき



まった格子(左):組み入れ穴が透りてみる。



□伝統と商業が一緒になった風景



### □美々津の町を理解するための『なぜ』

- ・町家はなぜ奥が深いのか
- ・格子が多用されているのはどうして
- ・バンコがある町家、ない町家の違い
- ・井戸の配置場所に理由はあるのか
- ・土間の形式が違うのはなぜか
- 天井が低い割には広く感じる
- 畳の敷き方にルールはあるのか
- ・中庭の役割りは
- ・まちの都市計画はどうなってか

美々津のまちを歩くと「まちのつくり」や「たてもの」について、いくつかの特徴に気がつくはずだ。そして、その特徴について 『なぜ』という問掛けをすることからはじめよう。『なぜ』が氷解した時、美々津のまちがもっと好きになるだろう。



□ 400 年変わらない美々津の町割り。現在では海が町からずいぶん遠くなった。



□日向市歴史民俗資料館:旧河内屋を改装したもの。平入の代表的な家屋である。



当時地のディストップの修算復元 された家屋、車庫の扉、何気ない 景色に町の復元整備の並々ならぬ 志を感じ取ることが出来る。



□中町の妻入り、切妻屋根が続く通り。川へ抜ける風景が印象的である。



□生産の場である倉庫も修景され、風景 の中に解けこんでいる。



□下町のシラス干場:天日干しの風景、絶妙な味と美々津のシラスは評判が良い。



### □美々津の歴史 交易と聖蹟のまち

美々津は、宮崎県の南部から北へ向かって走る平滑な海岸線がリアス式海岸へと移行する部分にある。美々津の北側を区切る耳川は、椎葉村に源を発し奥深い九州山地を蛇行して日向灘へ注いでいる。河口右岸に形成された美々津は古く弥生時代から瀬戸内や近畿地方との文化交流があった。

元禄時代以後、美々津は外様大名秋月氏の領有する高鍋藩城付地 (在町)として徐々に集落を拡大して行き、港町として発展する。当 時の美々津には、部当や 乙名などの役人が置かれ藩政の支配貫徹を 担っており、津口の警固や出船人船を管理するために番所が設けられ、城下から番代や蔵役が派遣されていた。一方、美々津の経済を 支えていたのは、備後屋、明石屋、泉屋などの屋号をもつ廻船業者で、瀬戸内地方や大阪方面を取引先として、耳川流域の林産物を中心に 商業活動を展開して、美々津千軒といわれるほどの繁栄をみた。

幕末から明治にかけての擾乱も廻船業にとっては、むしろ商品経済の活気を呼び込む結果となり、明治維新直後は一時的に美々津県が設置されて県庁が置かれた。しかし、大正12年に日豊本線が全通したことによって、美々津を支えていた廻船業は大きな打撃をうけた。

□美々津という都市:美々津には雑多な名字があり一軒一軒の姓が 違うと言われる。これは一村が数少ない名字で構成されている近在 の集落とは違い、美々津が闊達に外部世界と通じる門戸であった証 である。同じ質の家々が集まった農村、漁村は都市と言わない。都 市とは規模の大小ではなく、生産、流通、消費、交通、行政などの 諸機能が複合する多元的な結節点である。美々津は日向にあって海 路を通じ、日本各地に開かれた目として、独自の文化を培ってきた 都市であった。

□聖蹟のまち:美々津は神武天皇の「御東征」の出発地として言い 伝えられている。戦前、皇紀 2600 年を記念して美々津から浪速津 まで故事をたどり、西都原出土の舟形埴輪を模した木造船がこの地 から出航している。



護の啓発運動を展開している。

□保存と修復のたゆまぬ努力

廻船業の衰退によって千石船の出入りした港は漁港となり、転職に

よる人口の流出も徐々に進み、現在では過疎化と高齢者世帯の増加

を招いている。昭和42年には集落の西に国道10号線、美々津大

橋が新設されて、かつて、海、山、川を背景とした集落景観も大き

く変貌した。しかし、美々津集落内には往時の繁栄を物語る伝統的

な建物が多く遺されており、なかでも河口港に面した立縫と呼ばれ

このような状況のなかで、昭和58年6月に廻船問屋旧河内屋が

日向市歴史民俗資料館として開館し、同年9月には地元住民による

「美々津の歴史的町並を守る会」が誕生して、町並保存や文化財保

日向市では、昭和59年に伝統的建造物群保存対策調査を行い、

その成果をうけて昭和60年から補助金制度を導入し、伝統的建造

物の屋根の補修工事等に対し援助している。昭和61年12月には

重要伝統的建造物群保存地区に選定され、現在(平成23年3月)

る地域が比較的良好な歴史的景観をとどめている。

では延べ99軒の修復を終えたところである。

□弁財船の航路:美々津の商家には小倉屋、博多屋,豊後屋などの九州の地名よりも備後屋、明石屋、大阪屋、河内屋、伊勢屋など関西の地名を冠した屋号をもつ商家が多い。これらの屋号は瀬戸内圏との交流の深さを偲ばせるものである。

□耳川の不思議:耳川はもともと東郷町を南下せずに東流し、現在の塩見川の河道で海に注いでいた。14,000年前に富高に抜ける切り通し部が隆起し、現在の河道になった。従って、耳川は大河であるが河口部ではまったく沖積平野が形成されず、谷がそのまま海へ注ぐ、特異な川であり、それが特殊な景観をつくっている要因である。



□美々津最大のイベント: おきよ丸の出航(昭和14年4月18日)全長21m、重量50t、500石舟に相当する。



□大正初期の風景:美々津側に繋留されたおびただしい帆船。手前は幸脇側の貯木坑

### □宮崎県:耳川流域の代表的な木造建築物

本事業は耳川流域で保存状態のよい木造建築をその地域の文化とあわせて紹介するものである。そのうひ、椎葉・十根川集落、南郷・西の正倉院、東郷・若山牧水生家、日向・美々津集落、日向市駅の5つを特に選び、パンフレットをつくり紹介する。





### 参考資料 □□点志#

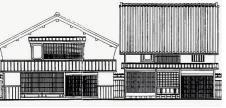
□日向市教育委員会告示 3 号(昭和 61.91)、□美々津: 伝統的建造物群保存地区保存対策報告書(日向市教育委員編、調査: 九州共立大学 尾道建二教授)、□日向写真註:家族の数だけ歴史がある(日向市編)、□日向市史資料編(日向市編)、□美しい日本の民家(川島市次著)、□日本の家(中川武著)、□日本のかた5歳起(小野瀬順一著)、他

」 ■このパンフレットは日本商工会議所の補助事業「地域資源∞全国展開プロジェクト」 で、日向商工会議所が推進する「木造建造物産業観光等プロジェクト」の一環でつくられたものである。 © 日向商工会議所 制作:川村宣元建築設計事務所 2012.1(1)

### □平入り・妻入り

建物の各面の呼び名とし て、長辺側、あるいは屋根 の棟と平行な面を「平」と いい、短辺側、あるいは屋 根の棟と直角な面を妻(つ ま)という。

日本の寺社建築・旧街道 沿いに残る商家等の町屋 建築における「平入り」や



□妻入り(左)と平入り(右)

「妻入り」とは、建物のいずれの面に正面出入口があるかによって分類し た様式で、平入りは上述の「平」の側に出入口があるものを指し、「妻」 側から出入りするものを妻入りという。

「萋」とは建物の中央や中心に対して他端を意味する「端」を語源とし、 配偶者の呼び名の妻は家屋の「つまや」に居たことから名付けられた。 料理の添え物として用いられる代表的な「刺身のつま」も同じ意味をもつ。 「姜」は「端」の意味で着物の「養」などと同源。

### □美々津棟梁の系譜

もともと船大工から普請大工へと変わっていった戸高氏と東氏の二 つの系統を 「棟札」で確認することが出来る

### □一線を分ける装置

みせには結界で仕切られた一角があり、そこを帳 場という。主人が帳付けや金銭の出し入れをする 重要な場所である。帳場格子で結界をつくり、帳 場机を置き、その背後に帳場簞笥を置く。通りに わの奥には格子戸があり、私的空間との結界をつ くる。格子は、密教の「灌頂の儀式」を行う礼堂 と正堂という二つの「密接で対である空間」を透 ながら分けた装置に源がある。これが中世の寺院 に用いられようになり、やがて町家にも広がり、 長い伝統のなかで独自に開花していった。

格子の働きは外と内を仕切るものであるが、内部 にいるものにとっては、外を常に内部の延長のよ うな意識でとらえるので、家の前の通りの清掃に いつも気を配るなど、通りに愛情を持って接する ことが出来る。格子は、内と外を仕切ると同時に、 つなぎとめる役割を持つ装置である。格子には平 格子、細目格子、木返格子、自板格子など様々 な種類がある。美々津の場合は、ほとんどが建具 には木返格子、造り付けには連子格子が使われて おり、町並みに統一感を与えている。





### □小さな仕掛け:ばんこ

「ばんこ」とは、ポルトガル語の banco やオランダ語の bank から きた言葉で、縁台・床几・腰掛などを意味する。折りたたみ式で、

通りに面した多くの家の軒先につくられ ている。近所の人たちがちょっと腰掛け てお喋りする、通り端の社交場になって いる。上方の商家で見せ棚として用いら れてきた「上げ床」」とシステムは同じ もので、この地の上方との強い結びつき を物語るものである。





### □ルイス・フロイスの記録に残る立神社

立磐神社は戦国大名大友宗麟に庇護されていたルイス・フロイスの 日記に記録されている。「同国の1/3を劃せる大河を渡りすでに敵 地に入り、司令官3人は立磐の大明神(Tateiwa no Day meugin)と 称する立派なる神殿に着きたり。ここは日本の神々のはじめなれば 大いに尊敬せられ・・・」(イエズス会士日本通信より) 当時の祭 神は「日本の神々のはじめ」であったことがわかる。美々津の町が 発展すると共に祭神は商売の神様である現在の住吉三神へと移って いったのである。ちなみに、鳥居の形式は上段の横木に反りがあり、 笠木を設け、柱は外側に転びが付く典型的な明神鳥居である。



# 町のしくみ 旧高鍋落船付提 耳川 改修もしくは復元済み1992-2010 地区の防火帯 「ツキヌケ」 公開されている施設 生産の場 1 高札場 立縫集落の歴史的経過、景観の特徴にもとづく区域区 2 食事処 シラス干場 A 渡舟場から札の辻までの上町の町並:江戸期、明治期の建物が並ぶ。番所、高札があった 3 美々津軒 B 札の辻の南の上町の町並:現況の商業地域 4 まちなみセンター 5 まちなみ防災センター 中町の町並中北部:汀戸期の町家が多い地域 6 歴史民俗資料館 )町並南半部:明治以降の間口の狭い家が並ぶ。東半分はかつての津波で消滅 7 生覚寺 下町の町並:明治以降の小規模家屋が並ぶ。南半分はD地区同様津波で消滅 8 愛宕神社 F 町並西側一帯の神社、寺院などと緑地 9 橋□家庭園 G 各町の東西の支道路、ツキヌケ (2本)

□耳川下流より見る。川岸間際まで町家が並ぶ。奥の森 □二本の道に沿ってびっしり並ぶ町家。整然と並ぶ家々 は立磐神社境内。(復元模型)



に美々津千軒のにぎわいをしのぶことができる。



は「ツキヌケ」と呼ばれる防火帯である。

## □集落構成とその特質

美々津の集落は耳川の河口に築かれた港を中心に展開しており、なか でも立縫は、港に隣接する要所であり、当初から計画的な集落構成が施 されていた。現在に遺る集落構成の成立期は詳らかでないが、1689(元 禄2)年頃には現在と同規模の集落が成立していることから、基本的な 集落構成の上限は近世初期まで遡らせることができよう。

立縫は、北の耳川河口に港を擁し、東に海、西に段丘を控える、東西、 南北300メートル余の集落で山手から海に向かって上町、中町、下町の 三町があり、このうち上町、中町の二街路が南北に通ってる。

上町は、耳川の渡舟場に直接通じ江戸時代には番所や藩蔵、役人の屋 敷、高札場があり、藩主が参勤交代の際に使用する仮屋も置かれていた。 明治時代以後は 商家が並び、現在もその面影を伝えている。中町には廻 船業者の商家が数多く建ち並び、その南半部には廻船業に従事する船員 や船大工が多く、それに漁師達が居住していた。下町には中町南半部と 同様に船員や舟大工が多く居住していたが、後に漁村の性格を強めた。

また、上町の山手には住吉三神を祭る立磐神社や浄土真宗正覚寺も置 かれており、いずれも正面を海に向けて建てられている。集落内の道路 は、港から南に延びる上町と中町の道筋を主道路とし、東西に走る支道 蕗がそれらをつないでいる。かつては下町にも南北に走る主道路があっ たと伝えられているが津波による侵蝕をうけて、現在では町の南半部が 消滅している。これらの道路は、いずれも直線的に構成されており、集 落と港との交通を配慮した道路構成と言える。ツキヌケと呼ばれる支道 路は火災発生時の延焼防止を主目的として計画的、組織的に設けられた ものと言われる。各町境界には低い段差があり、そこには石垣が積まれ ている。そして各家々の敷地境は石積み溝によって区画されている。

これらの伝統的建造物や宅地割、都市施設などは、港町としての美々 津の歴史を顕著に反映している。



□立磐神社脇の旧渡し場と立磐で神体の淵に係留された帆船(大正初期)



○ 近世の道割りの特徴である道の交差のズレが見いだせる部

### □元禄 2 年(1691) の絵地図の写し

度重なる大火で原本は消失しており、この絵地図は昭和初期に写され た何代目かの写し資料である。道割りには、街道筋を直線的に通さない 城下町的な道筋をいくつか現在でも見ることができる。特に、赤丸の部 分に近世の道割りを見いだすことが出来る。

### □災害の歴史

藩政時代の記録によると 1687 (貞享4) 年から 1854 (安政4) 年ま で12度の大火があり、そのうち2度は300戸を越える住戸が消失した 大火であった。この経験をもとに左記に記した都市防災施設「ツキヌケ」 が設けられた。津波や洪水にもたびたび見舞われ、1840(天保11)年には、 洪水、大波によって中町の東半分、下町の南半分の土地が消失している。 しかし、まちの骨格は元禄2年の絵地図を踏襲しており、幾度にもわた る普請によって、まちはよみがえっている。

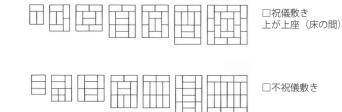
このような事情で美々津の町家は天保年間のものが一番古いものであ り、町並みとしては明治期の町家が主体となっている。



□「ツキヌケ」と井戸はセットで設けられた。

### □畳敷様 [ たたみじきよう ]

畳の敷き方を畳敷様といい、吉の敷き方である祝儀敷きと凶の敷き 方である不祝儀敷きがあり、一般的な住宅においては祝儀敷きが用 いられる。祝儀敷きは、床の間手前の畳を長手方向が床の間と平行 になるように敷き、後は畳と畳の合わせ目が T 字型になるように 敷いていく。一方、不祝儀敷きは、畳の角が十字型になる敷き方で



### □モジュール「畳割法」

古代ではまちまちであった柱間一間の寸法が定着するのは 15~ 16世紀で、柱間 6.5 尺に落ち着く。それまでの柱真々制から 16 世紀末には近畿地方を中心に 6.3 尺× 3.15 尺の畳(京間畳)をも とに柱間寸法を決定する畳割法が成立する。

### □縦横のデザイン

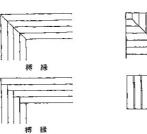
日本文化では垂直より水平、立体より平面が卓越する。縦よりも横 がよいという感覚がある。箸の置き方、床の間に畳や天井の棹縁が 縦に突き刺す形は「床挿し」といって嫌われた。縁側の板の張り方 にも上下の違いがある。縁側の長手方向に沿い縦方向に張ったもの を「くれ縁」、横方向に張ったものを「切首縁」という。切目縁の 方が格式が高い。神社や寺院の縁側はほとんど切目縁である。

外壁の板の横使い、縦使いにも同じような経緯がある。平安期は円 柱に溝を掘り板を落とし込む構法で横使いであった。縦使いは鎌倉 期に入って禅宗とともに伝わった唐様に始まる。縦ばりの板を受け る横材(貫)が出現し、この貫によって骨組みを固めるという木造 在来構法の基本が出来上がる。

### □縁側と板敷きの方向

切れ目とは木口の意味。くれ縁の くれは「榑」とも書く。板材を意 味し、平安期の規格では長さ12尺、 幅6寸、厚さ4寸。現代の感覚で は柱である。

室町期、大鋸の渡来で今日の板材 が生産されるようになった。



### □天井の低い二階部屋

床を他の居間の高さよ り低くするのが一般的 であるが、美々津の町 家の場合は床高は同じ である。その分、みせ の間の天井高さは低く 抑えられている。どの 町家も軒高が約15尺 で、公式には2階をつ くることが許されてい なかったので、美々津 の町衆はその寸法のな かで2階間をつくった。 桁の部分では頭をぶつ ける高さである。7尺 程度の天井高である。





□天井の低い茶の間

□平面の特徴

・通り庭を持つ形式を基本

# □優れた空間装置:中庭

通りに面して庭を設けることが出来ない近世の町家で発達し、植栽、 手水鉢、井戸などを設け、通風、採光の役割を果たす空間装置であ る。中庭の脇の廊下が雪隠、風呂へと導き、水回りは主屋とは分離 されている。



□吹き抜けの間(上)/なかの間:中庭との空間連 携で通風採光の要となる□ざしきの奥に広がる中庭 (右上) □蓬萊島を模してつくられたという中庭(右)

・居室の配置は1列型、2列型に分類される

3室並ぶのが典型的なプランである。

が多く、美々津町家の特徴と言える。

居室の北側に押入が並ぶ。

美々津の町家は1列型を基本としている。

・建物の間口は4~5間が多く、1列型、2列型が混在するが

・メインストリートが南北方向なので、町家は東西に細長い敷地となる。

・間口  $1 \sim 1.5$  間の「通り庭」が南側にあり、それにそって居室が

・居室は街路側より、「みせ」、「なかのま」、「ざしき」と並び、その

・「ざしき」は「庭」に面し、天井が高く吹き抜けになっていること

・2階は当初から非住居として使われている場合が多い。

家のしくみ

### □断面構成の特徴

妻入り、平入りが混在し法則性はないが、両形式とも軒先の高さ は同じであり、付け庇が形式によらず存在することで町並に統一感 を与えている。

下記の復元矩計図を見て、まず、寸法が目に入る。母屋間隔の 980㎜、各部屋が京間畳のモジュールで構成されていることがわか る。これは関東間より1割長く、面積にして2割大きいことがわ かる。次に、軒の高さが 4.440mmで、現代の一般住宅に比べ 1.000 mm程度低い寸法である。この高さの中に2階を入れ込むことになる ので、1階に「みせ」の天井高を確保すると、2階の天井高が低く なるのは当然である。

低い階高で有効に空間を使う手段として、スパン方向の梁を平面 プランの間仕切りにあわせて架け、それに小梁を半間ピッチで架け 渡している。多くの小梁を架け、断面せいを小さくして、天井の高 さを稼いでいる。2階架構では母屋を梁として使い、通常であれば 梁間方向に軒桁から反対側の軒桁まで架け渡す梁を外部から1本内 側の母屋から架け渡すことで、鴨居としての高さを確保している。

### □立面と平面の関係(商業形態の変遷を通して)

みせの表は通りに向けて格子を一種の結界として備え付ける形 式と前面を解放する形式があり、店舗の形態によってその違いを みることができる。江戸期の問屋形式の店舗の場合は来訪者は限 られており、前面を解放する必要はないので格子を用いて閉じた形 になる。通りに面する家の顔は、

「通り庭」の間口部の格子戸と、 となりに1尺程飛び出た格子戸 で1間幅の「ばんこ」と呼ばれ る折りたたみ縁があり、この構 成が美々津町家の基本型である。

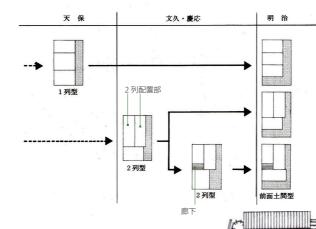
明治に発生した小売形式の店 舗では商品を並べ、通りから見 えるところに置くので、前面を 土間とし、引き込み戸を用いて 解放する形となる。前者の形式 は江戸期、後者は明治期の建物 の特徴である。その機能によっ て、ファサード(正面)から町 家の創建時期を類推することが



□明治期に建てられた間口全面土間型の 町家。妻入で、低い軒の典型町家である。

### □平面の変遷

天保年間では1列3室型の町家が多く、この形式が明治期にな ると前面土間式の1列3室型に変化し一つの系統をなす。一方、 2列3室型は文久年間に「みせ」と他の部屋が食い違う形で現れる。 さらに、慶応年間に「みせ」と「ざしき」に板の間が出来る形式 で変化し、明治期になると両者とも「みせ」の前に土間が出現する。



# 3 3 □一列型町家

□風通しの原理 家の瓦屋根は太陽に熱せ られ上昇気流が起きる と、中庭の空気が上昇気 流に誘引され動く。する と町家室内の空気がそれ に引っ張られ、表通りと 裏路地からが空気が中庭 に向かって動く。

町家は道路を基準としてつくられ、 農家は方位をもとにつくられると

敷地の間口で税が決まるため、間

はこうして出来上がった。

# できる。 中の概6% 5 207 (-#206) 240 (B) #189) 8 #成フローリン: #女女5×450

□典型的な町家の断面(復元改修時のもの)1/100

### □畳の寸法は何処も同じ

これに驚いた人物がいる。1942年、輸出工芸品の指導顧 問として日本に招かれたシャルロット・ペリアンである。 コルビジェと共同で多くの家具を世に送り出したデザイ ナーである。

桂離宮を訪れ、御所や寺院、旅館や料理屋であれ家を構成 する畳のモジュールが規準化されていることに驚いてい る。当時、まだコルビジェのモジュールの標準化は実現さ れていなかった。

<sup>6</sup> 畳基準寸法は 6.3 尺:1908.9㎜、座って半畳、寝て 1 畳、 人の最小活動範囲から来た大きさと言われている。コルビ ジェのモジュールは 1,829mm、人の背の高さそのものを基 準とする。微妙な違いはあるが基本は人間にまつわる寸法 から来ている。

日本のハウスメーカーのモジュールは 6.0 尺 1.818mmが多 く、最大は 6.6 尺 (2,000mm) である。

□□列型町家

とおりにわ 吹抜

# □町家の敷地

言われる。

口を狭くして、奥行きを深くする のが町家の基本である。道路に対 してそれぞれの町家が顔を出し、 「みせ」を構える。その「みせ」と「お く」をつなぐのが土間である。内 側の壷庭は緑を愛でる場でもある が、むしろ採光や通風の機能を持っ た装置である。

「鰻の寝床」と言われる町家の敷地